



発行：千葉県TEACCHプログラム研究会広報部

ホームページ：<http://www5e.biglobe.ne.jp/~teach/site17.htm>

千葉県TEACCHプログラム研究会
2014年12月20日(土) 第75号

「森」字・佐々木正美
イラスト・竹蓋伸六

事務局：千葉県発達障害者支援センターCAS内

TEL:043-227-8557



チームKの挑戦 ～父と息子の歩み・家族と支援者へのメッセージ～ 佐藤 彰一 先生（國學院大學法科大学院教授 弁護士）

弁護士として障害のある方とそのご家族の法的支援活動を展開されている佐藤先生に、今回のセミナーでは「父親としての立場」で、現在25歳の次男Kさんの歩みと、そのKさんをめぐる支援連絡調整会議「チームK」についてお話をいただきました。

ご家庭のお話 母親である奥様はKさんが1歳前後から、父親である佐藤先生はKさんが2歳前後（お仕事の関係でご家族で渡米されていた頃）には、「上の子と何かちがう」と困惑していました。Kさん2歳8か月の時にアメリカで自閉症の診断を受けましたが、「本を読んで『自閉症』では…と思ったが、受け入れられなかった。」「治らないわけではないと思っていたので、本の内容も信用できなかった。」と、その時の父親としてのお気持ちを話されました。幼い頃のKさんは多動で、日本に戻った3歳頃には一緒に歩いていても急に姿が見えなくなり、行方不明になってしまったことがあります。地元の小学校に通っていた頃は、家でも学校でも飛び出すことが多かったそうです。その後、養護学校中学部、高等部へと進学し、高等部3年生冬頃から不登校ぎみになり、外出も少なくなりました。卒業後の進路は知的障害者生活支援施設に決まりましたが、通所できない日が続き、(土)日)のどちらかに佐藤先生と外出する以外は家から出ないという状態になりました。当時、全国権利擁護支援ネットワークの会長をしていた佐藤先生は「外部活動している場合ではない」という思いで、活動を辞めようと考えたとのことでした。そんな時、佐藤先生を心配して駆けつけてくれた全国権利擁護支援ネットワークの関係者からのアドバイスを受けて、「外部の支援を受けていく」というスタンスで、佐藤先生が声をかけて支援連絡調整会議を開き、通所のバスに乗るための朝1時間のガイドヘルプの利用をスタートしました。その連絡調整会議に本TEACCHプログラム研究会の高木氏と與那嶺氏が加わって、「チームK」が発足したことでした。

「チームK」の取組

- ① **AAPEPによるアセスメント**；これからどんな支援を行うべきなのか評価をしました。「本人を知らないては何もできない、何も始まらない。まず評価をして、Kさん本人の理解の仕方をご両親と関係者に伝え、共通理解を図りました。」と、「チームK」に参加したT研スタッフの高木氏は、話していました。
- ② **朝の行動を構造化**；朝、家を出て通所のバスに乗るまでの行動の順番を決めて、毎日繰り返しました。行動に使うもの（テレビを消すリモコン、髭剃り等）を行う順番に並べておき、Kさんが手に取って持っていく、当該の行動が終わったら箱に入れていくという形式でした。母親が「でかけよう！」と言葉をかけることがだんだんと少なくなり、最終的には、言葉をかけなくても出かけられるようになったそうです。
- ③ **ガイドヘルプの構造化**；飛び出し防止のために、路地へ出るところにはスリッパを設置する等、様々な工夫をすることで、毎日、送迎バスで施設に通うことができるようになりました。
- ④ **体重管理他**；施設からの送迎バス帰宅時のコンビニでの買い物と暴飲暴食により、体重が急増したKさん。運動量を増やすために、2回/週、ヘルパーさんと施設から路線バスを使って散歩をしながら帰宅するようにしたことで、減量に成功しました。その他、毎週金曜日は施設に母親が迎えに行き、1週間、頑張ったご褒美としてスーパーでの買い物を設定すると、「買いたい物をかごに入れてレジにいく」ことができるようになりました。「買い物の手順が分かってきたようだ。」と佐藤先生はおっしゃっていました。

「チームK」の成果 関わる人たち全員が一堂に集まって「face to faceでやり取りして初めて分かる」と、佐藤先生は実感を込めて主張されました。その子がそれぞれの場所で見せる姿や思いを確認し合い、「～～はどうするか？」ということを繰り返し検討してきたことの成果であるということでした。「『チームK』の行ってきた正しい個別の評価と多職種のコラボレーションは、TEACCHの理念もあります。」と話すのは、「チームK」に参加しているT研スタッフの與那嶺氏です。佐藤先生は「今回の話は、佐藤家の特殊な事例ではない。みんな同じように困っている。このような「チームOO」が、いろいろなところで作られるように…」という言葉でお話をまとめられました。（文責：岡村）

出前トレセミから4ヶ月

八日市場特別支援学校

夏休み中の出前トレセミで協力をお願いした担任の先生から、4ヶ月経った現在の心境を書いてもらいました。教員になって2年目、3年目のフレッシュな先生達です。今後もT研の仲間として、研修を深め、実践を重ねていってほしいと願っています。

研修では、検査を通してどんな課題が「できる」「できない」、そしてもう少しできそうな「芽ばえ」なのかを調べたことで、改めて児童に合った教材について見直すことができました。また、トランジッションエリアを設定して、スケジュールを提示するということにも初めて取り組みました。Aさんの実態からスケジュール提示は一つずつ。トランジッションエリアに箱を置き、その箱に渡されたブロックをピットインしに行くことがスイッチとなり、箱のすぐ横に提示されているスケジュールを見ることで次の活動にうつるという流れです。それ以前は、直接具体物を渡したり、写真カードを見せたりして次にやることを伝えていました。好きな活動中などは、なかなか次の活動にうつるのが難しいこともありました。2学期から教室でもトランジッションエリアを設けたことで、自分で気持ちを切り替えて次の活動へうつることができる場面が増えました。特に、好きな活動中でも区切りの良さそうな頃合を見てブロックを渡すと、「いつもの場所にブロックを入れに行く」ということが分かり、好きな遊びを終わりにしてトランジッションエリアに向かうことができるようになりました。「教師と一緒に行く」「なんとなく一緒に行く」ではなく、「自分から次の活動に向かう」ことが増えたというのはとても嬉しい変化です。今後も、Aさんに合った教材やスケジュール提示の工夫などを続けることで、「自分でできる」「自分からできる」、そんな姿がたくさん見られるように取り組んでいきたいと思います。



小学部 岸本恭子



協力してくれたBさんは、私が担任を務めさせていただいて3年目となる生徒です。1年生から共に学校生活をおくる中で、彼に分かりやすい環境づくり、授業づくりをするには、どうしたらよいだろうと考えていた頃出会ったのが、TEACCHでした。手探りながらも少しずつ場の設定やスケジュールを実践してきました。今年、中学部3年生となり、課題学習の内容にも新しい視点を入れていけたらと考え、「研修会の協力者に」と保護者の方にお願いしたところ、快くご協力して下さいました。Bさん、保護者の方に感謝しています。

今回のセミナーでは、Bさんの実態把握から始まり、場の設定、スケジュールの見直し、課題づくりと盛りだくさんの内容でしたが、Bさんが淡々と取り組み、楽しそうにしている姿が印象的でした。改めて「分かる世界」→「分かる環境づくりをすること」の大切さを実感した2日間でした。また、このセミナーを通して多くの先生方にBさんを知っていただけたことも私の中で大変嬉しいことでした。おかげで自立課題の種類も増え、毎日Bさんのトレードマークであるニコニコ笑顔で課題学習に取り組んでいます。

中学部 太田千尋

夏季研修で頂いた意見をもとに、スケジュール表や課題の提示方法や内容の改善を行いました。まず、「持ち運び式スケジュール」を用意したこと、急な場所の変更にもスムーズに応じができるようになりました。現在は、次の活動の見通しがもてるようになり、自分から主体的に活動に取り組むことができるようになったことなど嬉しい変化がたくさん見られています。課題の内容も増え、最後まで一人で取り組むことができています。また、自立課題だけでなく、裁縫や工作でも指示書を活用することで、一人で取り組めるようになりました。

たくさんの先生方にご協力いただいたおかげで、Cさんにとってだけでなく、自分自身にとってもよりよい指導・支援のための在り方を深めることができました。今後とも、生徒一人一人が力を発揮できる指導を行っていきたいと思います。

高等部 東 郁美

<第6回セミナーのご案内>

日時：平成27年2月21日（土） 13:30～16:30

場所：きぼーる13階、会議室1・2・3

内容：学校職員・施設職員・保護者による実践発表

<編集後記> 「佐藤先生のお話」「八日市場特別支援学校での出前トレセミ」と今回の広報の内容は、人ととのつながり、つまり「連携」と「協働」がいかに重要であるか、実践されていたものでした。まさに「TEACCHの理念」の根本の一つですね。今後も、千葉県内で、たくさんの「人ととのつながり」がASDの方のよりよい支援に結びついていくことを願ってやみません。（山中）